

GA337

国際社会演習－国際協力を捉える視点－

松本 悟

配当年次／単位：3～4年／4単位

旧科目名：

旧科目との重複履修：

毎年・隔年：毎年開講 | 開講セメスター：春・秋

人数制限・選抜・抽選：選抜

他学部への公開：×

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

「国際協力」とは異なる文化的背景を抱えた人々のつながりの一形態であり、演習で扱うイシューは国際協力を必要とする背景や実施した影響も含む。具体的には、貧困、環境、開発、格差、紛争、難民、教育などの「グローバルイシュー」、国際機構、NGO、政府機関、企業などの「組織」、ボランティア、募金、善意、助け合いなど「国際協力を実践する個人や社会のあり方」、そうした実践を表象するメディアも学びの対象とする。その前提に立って、国際文化学部の学生として「国際協力」やその背景要因、意図せざる結果を考察する多様な分析視角＝視点を見つけることを演習のテーマとしている。

【到達目標】

【3年春学期】「国際協力」を広く分析する人文社会科学の視点や方法論を習得し、各自が研究したいテーマと研究方法を見出せるようになる。

【3年秋学期】実際に調査・取材や研究に携わってその結果を発表したり、先輩の研究の進捗に積極的に触れたりすることを通して、研究に必要な方法を習得し、各自が研究したいテーマに関わる意義ある問いや仮説を立てられるようになる。

【4年春学期】「国際協力」に係る事象を分析する人文社会科学の視点を深めるとともに、自らの研究テーマに沿った調査を進めることで、実践知（フロネーシス）として知識を捉えることができるようになる。

【4年秋学期】先行研究や適切な方法に基づいた研究論文の執筆と研究発表を行うことができるようになる。

【授業の進め方と方法】

【概要】春学期は国際協力やそれを必要とする問題群および人文社会科学の調査方法に関する日本語もしくは英語の文献を読んで議論する。秋学期は日本語もしくは英語の学術論文を読んで研究方法を議論すると同時に4年生の研究発表を題材に実践的な演習を行う。そのために法政大学懸賞論文国際文化情報学会を積極的に活用し、4年生は原則全員が発表する。また、夏休みには開発途上国へのフィールドワークを予定している（自由参加、自費）。

【方法】

◆文献講読：課題文献を毎回割り当てられた学生が読んで来て発表し、それをもとに議論する。担当教員は関係する分野についてインプットをする。

◆外部講師：課題文献の内容を深く理解するために外部講師を招くこともある。

◆海外フィールドワーク（開発途上国）：テーマを定めて夏休みに実施する（自由・自費参加）

◆ゼミ合宿：夏休みの終わりに行う予定。

【授業計画】

春学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス	演習の中身を共有し受講生の関心に合わせて変更する。
第2回	国際協力とは何か	国際協力の種類と仕組みを学ぶ。
第3回	国際協力の歴史	第二次世界大戦後の国際協力の歴史を学ぶ
第4回	貧困と貧困削減	貧困の捉え方や様々な貧困削減のアプローチについて学ぶ
第5回	平和構築と復興支援	紛争地域の平和構築や復興に対する国際協力のあり方について学ぶ
第6回	持続可能な発展とガバナンス	自然・社会環境と調和した開発のあり方や、それに必要なガバナンスについて学ぶ

第7回	国際協力に関わるアクター	企業、市民社会など、国際協力に関わるアクターについて学ぶ
第8回	開発経済学の視座①	開発問題を開発経済学から捉えた視点を学ぶ
第9回	開発政治学の視座②	開発問題を開発政治学から捉えた視点を学ぶ
第10回	開発社会学の視座③	開発問題を開発社会学から捉えた視点を学ぶ
第11回	調査方法（1）	量的調査法を実践的に学ぶ
第12回	調査方法（2）	質的調査法を実践的に学ぶ
第13回	春学期のまとめ	春学期に学んだ内容についてKJ法を用いて議論する

第14回	フィールドワーク準備（1）	夏休みの海外フィールドワークの事前学習を行う
第15回	フィールドワーク準備（2）	夏休みの海外フィールドワークの調査項目検討などの事前準備を行う

秋学期

回	テーマ	内容
第1回	ガイダンス、発表の方法	春学期の振り返りと秋学期の説明。発表の方法に関する講義
第2回	研究論文の検討（1） 仮説検証型論文A	実際の研究論文を読む
第3回	研究論文の検討（2） 仮説検証型論文B	実際の研究論文を読む
第4回	研究論文の検討（3） サーベイ論文A	実際の研究論文を読む
第5回	個人研究発表と批評（1）	3年生が夏休みまでに実施したライフストーリーの発表とグループに分かれての批評会（12人のゼミ生中最初の4人）
第6回	個人研究発表と批評（2）	3年生が夏休みまでに実施したライフストーリーの発表とグループに分かれての批評会（12人のゼミ生中次の4人）
第7回	個人研究発表と批評（3）	3年生が夏休みまでに実施したライフストーリーの発表とグループに分かれての批評会（12人のゼミ生中最後の4人）
第8回	研究論文要旨に対する討議	国際文化情報学会の予稿を事前に読んできた上で議論しあう
第9回	個人研究発表と批評（4）	国際文化情報学会の発表練習（発表者の半分、8人程度）
第10回	個人研究発表と批評（5）	国際文化情報学会の発表練習（発表者の半分、8人程度）
第11回	学会振り返り	国際文化情報学会での発表に対する相互批評
第12回	研究論文の検討（4） サーベイ論文B	実際の研究論文を読む
第13回	秋学期のまとめ	秋学期に学んだ内容についてKJ法を用いて議論する
第14回	パネル討論会	2年間のゼミでの学びについてパネル討論を行う
第15回	個人研究発表と批評（6）	3年生による個人研究発表と批評

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

・春学期は毎回課題文献を指定するので、発表者だけでなく全員が必ず事前に「精読」してくる。分量が多かったり、文章が難解だったり、時には英語だったりするので、時間をかけて時には他のゼミ生と議論をしながら読んでくること。

・秋学期は他のゼミ生の原稿をもとに議論することが多いので、事前に与えられた原稿を必ず精読してくる。その際、表面的な批判に留まらず、執筆者の懐に入ったコメントをできるようにすること。

・毎回演習後のHOPSもしくは授業支援システムを通したフィードバックを行い復習すること。

・ライフストーリー、研究進捗、論文執筆など提出物が多いので必ず期限までに執筆を終わらせ提出すること。

・夏休みに英語で実施する開発途上国へのフィールドワークに参加する場合は、事前学習を十分行い、帰国後論文やポスター等にまとめて発表すること。

・法政大学懸賞論文、外国語でのスピーチコンテスト、観光や開発に関わる論文コンクールなど大学内外のコンテストへの投稿・出展を奨励・サポートするので、積極的に挑戦すること。

【テキスト（教科書）】

4月の演習が始まるまでに最低1度は以下の文献を読んでおくこと。
下村恭民ら編『国際協力新版』有斐閣選書, 2009年。
鹿島茂『勝つための論文の書き方』文春新書, 2003年。
伊丹敬之『創造的論文の書き方』有斐閣, 2001年。

【参考書】

演習の中で指定する

【成績評価の方法と基準】

毎回「演習の学び」をHOPSもしくは授業支援システムに提出：40%、文献講読と発表：30%、個人研究論文の執筆と発表：30%。
ただし3年生は各学期に4回以上欠席した場合は単位を取得できない。

【学生の意見等からの気づき】

ゼミの時間が長すぎると学びの質が低下するため、19時までには終了するようにする。ゼミ生が何を学びたいかを意見聴取した上で、ゼミの内容をアレンジする

【学生が準備すべき機器他】

- ・HOPSもしくは授業支援システムを頻繁に使用する
- ・正式の連絡は演習のMLで伝える
- ・パワーポイントでの発表の際はパソコンを用意すること

【その他の重要事項】

- ・図書館、CiNiiやWeb of Scienceなどの大学のリソースを早めに使えるようになること。
- ・授業内容は変更がありうるので3月の演習説明会や4月の授業時に説明する。
- ・3年、4年と継続して履修すること。ただし、途中で関心を失ったり、他にやりたいことを見出した場合は履修登録を見送ることを推奨する。
- ・4年次から履修する場合は、3年次までに人文社会科学的な見方や学術的な研究の方法を一定程度身につけ、かつ本演習に係る具体的なテーマを設定し文献研究を進めていること。
- ・国際文化協力、平和学、国際関係学概論、国際関係研究、実践社会調査法、実践国際協力など、関連する授業を受講すること。
- ・本演習を希望する現2年生や1年生は、2016年1月29日（日）の終日、ポアソナードタワー3Fマルチメディアスタジオ（予定）で開催される『松本ゼミ公開卒論発表会』への参加を推奨する。詳しくは松本ゼミの知り合い、もしくは教員に直接問い合わせること。